平成 30 年 8 月 24 日

平成 30 年度第 2 学期始業式　校長講話

皆さん、おはようございます。心配された台風も日本海へ抜けていき、今日から新しい学期がスタートしました。この夏休みは皆さんにとって、長かったですか、それとも短かったですか。補習や学習合宿に積極的に取り組んだ人、部活動や様々な研究活動に頑張った人、また、家族や友達との色んな思い出づくりに励んだ人、皆さんそれぞれ充実した夏休みを過ごしたことと思います。この間、事件や大きな事故もなく、こうして、元気に皆さんと再会できたことを安堵するとともに、とてもうれしく思っています。

今朝はまず、おめでたいニュースを二つ紹介したいと思います。一つ目は、本年度の「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要にかかる募集作文選考」において、本校、高校 3 年 5 組の大岡光咲さんの「世界を無視しないために」が最優秀作品に、また、高校１年５組の福岡真凜さんの「人生を生きる」が優秀作品に選ばれました。大岡さん、福岡さん、おめでとうございます。なお、最優秀の大岡さんは、９月１８日（火)、東京千代田区の国立・千鳥ヶ淵戦没者墓苑にて執り行われる「追悼法要」の場で、受賞作文を朗読することになっています。堂々と自信を持って朗読してきてください。

二つ目は、「龍谷アドバンスト・プロジェクト」（通称ＲＡＰ）法学の課題探求において、高校１年３組の４人が優秀賞を受賞しました。夫婦別姓についての発表が高く評価されたと伺っています。努力の甲斐がありましたね。おめでとうございます。そのほか、夏休み中のクラブ等の成果については、この後、表彰状をお渡ししたいと思います。

さて、私たちは日々の生活のなかで、少なからず悩みや不安を抱えて生きています。例えば、校長先生の場合だと、血圧が高いとか、体のあちこちが痛いとか、１０年後２０年後が心配などなど、心配ごとはたくさんあります。中学生、高校生の皆さんも、成績のことや進路のこと、部活のこと、友人や家族のことなど、心配なこと気がかりなことがたくさんあることと思います。人間というものはとかく、困難に出会うたびに、なぜ自分だけがこんな目に遭うのかと悲観して、他人を責めたり、もうどうなっても良いと自暴自棄になったりしがちです。

しかし、遺伝子学者の木村もとおさんという方は、「生き物が生まれる確率は、１億円の宝くじに百万回連続して当たるのと同じくらいすごいこと」という言葉を残しておられます。

また、その言葉を引用して、遺伝子研究の権威である村上和雄さんも「人間はこの世に生まれてきただけでも、この自然界で大変な偉業を成し遂げたのであり、自分が生きているということは、まさに奇跡中の奇跡と自覚すべきだ」と述べておられます。人間として生まれてきた価値を認めたうえで、困難は自分に与えられた試練と捉え、成長するチャンスをもらったと受け止めることが大切です。そう思えると希望が湧いてくるものです。そして、それを乗り越えたとき、大きな自信が生まれ、新しい世界が開けるはずです。

相愛には１２０数名の中学生と３５０数名の高校生、合わせて５００名近くの生徒の皆さんが机を並べて学んでいます。そんな中で、時には意見の衝突やイラっとする時もあるかと思いますが、お互いに周囲を気遣い、思いやりと寛容の広いこころを持って、楽しく充実した学校生活を過ごしてほしいと願っています。

２学期は３つの学期の中でいちばん長く、様々な学校行事が予定されています。９月下旬には中２のオータムスクールが行われますし、１１月には皆さんお楽しみの文化祭も予定されています。どうか皆さんには学習や部活動、生徒会活動、その他色んな事に積極的にチャレンジして、二度とない青春の日々を大いにエンジョイしてほしいと思います。

とりわけ、高３の皆さんは、この数ヶ月の間に自分の進路を確実なものにしなければなりません。１７・１８歳にして人生の大きな試練に立ち向かうことになるわけです。でも、先ほどお話したように、困難はチャンスの前ぶれです。地道にコツコツ、やるべきことをしっかりとやり続けて、新しい世界を切り拓いて行ってほしいと思います。どうか希望と自信を持って頑張ってください。皆さんの健闘を期待しています。お話は以上です。